

石川淳と小松清

——昭和初期におけるジイド受容をめぐる——

若松伸哉

大岡昇平は文芸雑誌『作品』一九三四年四月号に寄せた「ジイドの流行」というタイトルの「文芸時評」において次のように述べている。

今月からジイドの全集が同時に二種類（建設社版と金星堂版）も出だした。ジイドの流行は一昨年春光書店がジイドの評論集を出して忽ち再版した頃から漸く明かになったのだが、それが今日の如き隆盛にまで発展しようとは當時まだ唯一人想到することが出来なかつた。これを招致した功績は主として河上徹太郎、小林秀雄の両氏に帰せらるべきであらう。「背徳者」「狭き門」などからただ高雅な情操と繊細な心理描といふ風に賞讃され、どつちかといへば甘ちゃんとして除け者にされてゐたジイドが、両氏の手によつて始めて強靱な批評精神の持主として新たに登場する

ことになつたのである。爾来人々は彼の洩らす隻言半句と雖も聞き逃すまいといふ程の細心さで、彼の足跡を追ふことになつた。多勢の仏文学者が動員されて、彼の小説は勿論、日記、ノートの際に到るまで続々と翻訳された。そして今日は全集出版の旺盛を見る。ジイドの流行も遂に頂上に達した観がある。

一九三五（昭和一〇）年前後の日本文壇におけるフランス人作家アンドレ・ジイドへの注目のあり方がよくわかる。そしてジイドの影響を受けて書かれたと言われるのが、すでに文壇の中心人物の一人であつた横光利一が、「もし文芸復興といふべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は絶対には有り得ない」と書き起こす「純粹小説論」（『改造』一九三五・四）だ。文芸復興のための「純粹小

説」を主張し、文壇に大きな反響を呼んだこの評論が持つ意味はこれまで様々に検討されているが、本稿で確認しておきたいのは横光利一がこのなかでジイドに影響を受けながら、「自意識といふ不安な精神」を描くために「自分を見る自分」としての「四人称」を具体的に提唱している点である。文芸復興の氣運のなかで純文学の変革が企図され、その最も中心的な評論となった横光利一「純粹小説論」のなかでジイドの方法も言及されたのである。そしてこの横光の問題提起にいち早く反応した小林秀雄「私小説論」(『經濟往来』一九三五・五〇八)は、やはりジイドの名前に触れつつ、フランスの私小説における「社会化した「私」」について説明している。

ジイドに触発された横光の評論は、その後が続いた小林の「私小説論」をはじめ、いわゆる〈純粹小説論争〉と呼ばれる論争を惹起し、当時の文壇の中心的話題となるが、横光の「純粹小説論」が発表された一ヶ月後、文芸雑誌『作品』一九三五年五月号に小説「佳人」を発表し文壇に登場したばかりの石川淳は、エッセイ「私小説の読者として」(『文芸通信』一九三五・七)のなかでこの文壇の同時代トピックについて触れている。

近代文学に於ける「私」の跳梁を説きつつルソオより始

めてジイドに及ぶことは雄大な文学論を成す所以ではありませうが、今わたしにはかかる試みが甚だ億劫に感ぜられますし、また、私小説そのものがいいの悪いのと云ふ愚論は別として、個人的な「私」を社会的な「私」に押し進めると云ふやうな論じ方も私小説とはだんだん縁が遠くなるやうな氣がするのです。つまり「私」が四人称小説と云ふ如き高次元へ向つての楔になるとか、複雑なる社会機構の網目の一つとして万象をずる／＼引き寄せる手がかりになるとかした既には、それはもう文学の他の問題として取り上げらるべきで、その時には既に本来の私小説の問題を踏み超えてしまふのではないでせうか。

ここで石川淳が横光「純粹小説論」と、それを受けた小林「私小説論」の内容を意識しているのは明らかなのであるが、注目したいのは石川淳は「四人称」も「社会的な「私」」も「文学の他の問題」であり、「本来の私小説の問題を踏み超えてしまふ」と否定的に捉えている点である。石川淳は「佳人」での作家デビュー前の一九二四年にはジイド『背徳者』(新潮社)を、一九二八年にはジイド『法王庁の抜穴』(岩波文庫)の翻訳を手がけており、ジイド翻訳者の一人でもあった。本稿ではジイドをめぐる発言が繰り返される当時の日本文壇におけ

る言説を確認しつつ、そのなかでの石川淳の態度を考察してみたい。そしてその点を考えるにあたってもう一人注目したい人物が同時代のフランス文学者・小松清である。

一

一九三五（昭和一〇）年前後の日本文壇におけるジイドの流
行は横光が言う〈不安な自意識〉を描くための「自分を見る自分」という小説の方法的意識が大きく注目を集めた要素の一つだったことは確かだが、こうした文学の技術的な側面以外のジイドの姿を当時繰り返し論じた人物が小松清だった。

石川淳と小松清の直接的な交流は確認されていないが、両者は重なるところが多い。一八九九（明治三二）年生まれの石川淳に対し、小松清は一九〇〇年生まれで同世代であり、両者は大正期にはそれぞれいわゆる左派思想に共鳴もしている（石川は特に大杉栄などのアナキズム思想に近づき、小松は社会主義運動団体「建設者同盟」に参加している）。そしてさらに両者ともにフランス文学に親しみ、フランス文学者として活動もしているのである。^{注1}

小松清の名前が日本近代文学史上において言及されるのは主

に昭和初期の〈行動主義〉の中心人物としてである。〈行動主義〉の中心となったのは小松清のほか、舟橋聖一・阿部知二・青野季吉らで、〈文芸復興〉を印象づけた文芸雑誌『文学界』『文芸』の創刊と並んで登場した文芸雑誌『行動』（一九三三・一〇創刊）を拠点として展開されたのが〈行動主義〉である。

行動主義はマルクス主義退潮後の知識人のあり方を模索した動きの一つであるが、統一的に展開され理解された理論とは言いがたい。しかしたとえば、青野季吉「能動的・精神的の抬頭について」（『行動』一九三四・一一）は「懷疑と、不安と、動揺と、焦燥とは、いまこの国の知識階級のおかれてゐる現実の気持ちだと云はれてゐる」「だが、それと同時に、その消極的な気持ちの底から、能動的な気持が芽を吹き、能動的な精神が目をさましつつあることも事実である」と述べるように、知識人が虚無から脱し、社会的な面において行動的・能動的に活動していく姿勢が強調される。また、文芸雑誌『行動』の編集委員でもあった野口富士男が『行動』について、「マルキシズムとファシズムのはざままで知識階級はいかに生きるべきかの問題が、この雑誌を中心に展開された」と回想しており、プロレタリア文学とも一線を画しつつ、当時の日本あるいは世界的なファシズムの動きにも対抗していくことが試みられていたのも特徴の一

つとなつてゐる。

昭和一〇年前後の日本の文学界において大きな話題ともなつた行動主義だが、そもそもその発端には一九二七年にフランスのラモン・フェルナンデスが提唱した「行動的ヒューマニズム」がある。そしてこうしたフランスの文学事情を紹介しつつ、日本で行動主義文学運動を主導していったのが小松清である。小松清「アンドレ・マルロオと行動の文学」(『セルパン』一九三四・七)は、日本の行動主義文学運動の端緒の一つと目される評論だが、このなかで小松はとりわけアンドレ・マルローの代表作「人間の条件」(一九三三年)を取り上げ、「支那共産党革命を史的テイマとし、その圧力のうちに行動し争闘し体験し思索する幾多の個人的条件、その孤独、その悲痛な孤独、さうして死に直面した人間のみに許される真のヒロイズムと友情の交響曲を奏でる」と述べ、論の終盤で次のように記す。

私は彼によつて始めて近代芸術の意義を教へられた。彼によつて芸術を文学を、行動と経験への一つの局限された手段として考へるやうになつた。それらが永い世紀に涉つて保持してゐた美的完成の觀念を失ふことによつて、無報酬の行為性を発見し、それが為めにより大きな可能性を加

へたことを私は知つた。彼の文学にあつては偉大さは思想そのもの、うちに存在しない。そこには行為の現実、に審判される思想と、思想を前にして飽迄勇敢であらうとする行為があり、その峻烈なプロセスのうちに人間的試練が立つてこそ、マルロオの文学がもつ現代的意義が自ら釈然とするのである。(傍点原文)

小松清はマルローの小説のなかに描かれる「行動し争闘し体験し思索する」登場人物の「無報酬の行為性」に注目し、思想を補完あるいは相克しつつ、偉大な人間性を顕現させる行為の重要性を強く訴える。

小松清はマルローを大きな柱として行動主義文学運動を展開していくが、行動主義の重要な作家としてマルローと並んでたびたび小松がこの時期言及するのがアンドレ・ジイドである。

小松清「アンドレ・マルロオと行動の文学」発表の翌月に小松は「仏文学の一転機」(『行動』一九三四・八)を発表する。野口富士男が「行動主義文学提唱のきっかけとなつた」と呼ぶ評論だが、このなかではアンドレ・ジイドが話題の中心^{注5}となっている。一九三五(昭和一〇)年前後に日本の作家たちにとりわけ言及されたジイド作品は一九二六年に発表された「贖金つ

くり」だが、その「贗金づくり」脱稿直後にジイドは仏領コンゴに旅行をし（一九二五年）、その苛烈な植民地政策のありさまを「コンゴ紀行」（一九二七年）のなかに書き記し、社会問題の関心を明らかにしている。そして一九三〇年代には共産主義への接近も示し、この一連のジイドの左傾化はフランスでも話題となっていた。前述したように日本文壇におけるジイドへの関心の中心は、もっぱら〈不安な自意識〉を描くための「自分を見る自分」（横光利一「純粹小説論」）と表現された小説の方法的側面であったが、「コンゴ紀行」にはじまるジイドの社会へのコミットという面について、この時期日本で積極的に紹介したのが小松清であった。

小松清「仏文学の一転機」は、「コンゴ紀行」以降のジイドの社会への関心について述べているものだが、ジイドのこうした変化について小松は「今日喧しく論議されてゐるそのコムニズム思想すら若き日のジイドに萌芽してゐた」と、急な変化ではなく、もともとジイドの持っていた問題として提示する。

が故にジイドの文学をば画一的に単なる自我意識分析の文学と見做すことはジイド文学の含有する十九世紀的な個

人心理主義の要素をもつて全体を裁定しやうとする大きな誤謬である。いまこゝに説くまでもなく社会的現実の動き

から離れて個人意識の生存と発展を思考することの不可能は明瞭であるが、ことにジイドの如きモラリストの意識生活に浸透するためには尚更のことである。それほど彼にあつては社会的自己と内部的自己の相関と一致の真理、また社会的反省による自我の拡大と進歩の問題が断然なく反覆され思考されてきたのである。人間ジイドの偉大さはまさにこのモラリテに立脚したところに存するのであつて、彼の芸術はたゞそれがためのある手段であり訓練であり記録であるに外ならない。彼にとつて文学することそれ自身は窮極の価値ではない。完全なる行為ではない。ジイドの文学は一つの局限された方法による「世界と自己」の關係の明細書である。彼は屢々この明細書を告白や懺悔の形式に、そうして時代を隔つるとともに、糾問や告訴の形式に現してゐる。従つてこれらの形式の変化を通して「世界対ジイド」の關係の推移を考へることが出来る。即ちジイドの糾問や告訴は彼の内部生活が漸次的に自我的思索の域から超脱して歴史と社会を対象としたものの上に移されて行つたことを示すものである。（傍点原文）

小松はジイド作品にかねてからあつた「個人意識」（内部的自己）は、常に「社会的自己」との相関のなかにあり、現在

ではそうした意識が「自我」から離れ、「歴史と社会」へと移っていったと説明する。小松はこのようにジイド作品の道行きを自己意識からそれと相関する社会意識への移行として捉え、さらにこの社会へのコミットについて同論のなかで「大きな欧州の不安を前にして混沌と動揺に苦み悩んでゐる今日のフランスに何物かある異常な能動的な精神が誕生しつゝあるやうに私には思へる」と、ヨーロッパにおける政治不安を背景にジイドをはじめとしたフランス文学界にあらわれた文学的傾向として論じている。

この後も小松は「新しきジイドの途」(『新潮』一九三五・一)、「ジイドはなぜゾラを読むか」(『文学案内』一九三五・一〇)、「ジイド・マルロオを中心にフランス文壇の現状を語る」(『文学案内』一九三六・二)、「ジイドと創造の魔神」(『新潮』一九三六・一〇)、「ジイドのソヴェト批判」(『文学案内』一九三七・二)などにおいてジイドの社会・政治に対する左派的な姿勢を語っていくが、そこではこの時期のヨーロッパの政治不安とそれに対するジイドの実際的な行動についても言及されていく。たとえば小松清「NRFの新動向」(『新潮』一九三五・七)は次のように記す。

(一)二、三年以来NRF誌を通じて見られる、もつとも

顕著なそして有力な一連のイデオロギイが、直接間接、いはゆる「転向以後」のジイド思想によつて強い刺戟と影響を受けてゐることを、私は既に色んな機会に述べてきたが、それらを総合して端的に云ひ現せば、それらはより多くの、《現代的な社会意識》の把握にむかつて進みつつあると云ひ得る。ことにスタヴィスキイ事件に因を發した、昨年二月の巴里暴動があつてから、それに関連して諸々の社会・政治の問題が誌上で重要な検討の対象となるやうになつた。

ここで言及されている「スタヴィスキイ事件」とは一九三三年末から翌年始にかけてフランスで起こつた政府要人も関わつた疑獄事件で、右派勢力と彼らに扇動された民衆による一九三四年二月六日のクーデター未遂事件(引用文中の「昨年二月の巴里暴動」)につながり、さらにそれはフランスの右翼・左翼の対立を激化させていく。このような社会的事件がフランスでは当時起こつていたわけだが、これに関連して雑誌『NRF(新フランス評論)』の変化を小松は指摘しているのである。

『NRF』はジイドが中心となつたフランスの有力な文芸雑誌で、日本にも大きな影響を与えているが(石川淳の文壇登場の舞台となつた文芸雑誌『作品』も『NRF』をモデルとして

いる)、ジイドの影響により『NRF』もまた文学にとどまらず「社会・政治の問題が誌上で重要な検討の対象」となったことを小松は語る。また、フランスにおけるこの政治事件は反ファシズムを主軸とした人民戦線の成立につながっていくが、こうした動きとジイドの実際的な行動についても小松清は「マルロオへの手紙」(『新潮』一九三六・二)で触れている。

「侮蔑の時代」が完結されたNRFの五月号が僕の手許についたころ、忽如として六月下旬巴里で国際作家大会が「文化の擁護、ファシズム反対」のために催されると云ふ報道が伝へられ、吾々を欣ばした。大会が閉ぢてから後のことであるが、色んな報道によつて、大会の成立がジイド、バルビュス、エレンブルグそして君(引用者注——アンドレ・マルロー)などの献身的な努力に負ふところ大なるものあることを知つた。大会の反響はわが国の識者の間や文壇でも可成強いものであつた。

「文化の擁護、ファシズム反対」を訴え一九三五年六月に開催されたパリ国際作家大会におけるジイドら作家たちの姿を小松は書き記すのである。

一九三六年二月、スペインでは左派による人民戦線政府が成立し、同年七月にはそれに対して軍部や右派が反乱を起こし、

スペイン内戦がはじまる。左翼勢力と右翼勢力が争つたこの内戦は世界中の注目を集め、人民戦線側には小松清が行動主義の作家として紹介したアンドレ・マルローをはじめ知識人が義勇兵として参加し、反乱軍にはイタリアやドイツなど当時のファシズム国家が支援をした。この時期、ヨーロッパは政治的・イデオロギー的な対立や動乱が続いており、こうした不安定な社会へのコミットを行うフランスの作家たちを小松は行動主義として紹介したのであり、そのなかに当時日本の文学界でブームともなっていたアンドレ・ジイドも含まれていたのである。

二

一九三五(昭和一〇)年前後の日本の文学界において、純文学変革のためのキーパーソンとしてジイドが捉えられていること、そしてその一方で特に小松清が社会に関わっているジイドの姿を積極的に紹介していたことを前節で確認した。また、純文学と通俗小説の接合によつて文学の〈大衆〉性を射程に入れる横光の「純粹小説論」や、「社会化された私」を提唱する小林「私小説論」にもジイドの姿勢の影響が見て取れる。ではジイドの翻訳も行っている石川淳は小松清が展開するジイドの姿

に關してどのような言葉を記しているのか。

『作品』一九三四年二月号に發表された石川淳「ジイドの「日記」に就いて」は、冒頭でジイドのソビエトへの好意の大きさと、それによつて「文學的関心」を失つてしまつたというジイドの日記のなかの言葉を紹介し、「今コンミュニズムは彼にあつて残滓とならうとするものを切り捨てたのである。ここに云ふ「文學的関心」とはジイド的思弁の飛翔にとつての死量でなくて何であらう。この切斷に當つて、ジイドは苦痛を以てせずしてそれを成し遂げることができなかつた筈である」と述べ、高まる社会への関心から「文學的関心」を捨てたことへのジイドの痛みを読み取るうとしている。文学から社会的関心へ転向したジイドの痛みを伴つた心境を想像し、それを思いやるような口調で石川淳は述べているのだが、しかしながら同エッセイの末尾は文学への関心を減退させたジイドに対する微妙な距離感が示されてもいる。

かくてジイドは遂に次のやうに述べるに至つてゐる。曰く「従来自分の裡にあつて成長しつゝあり、そして今や十分成熟の時期に達した他の問題が堂々としてその歩みを始め、ほかのことはすべてその後に従へてしまつた。このこと甚だよし。」——しかしここに云ふ「ほかのこと」の中

には既に重要でなくなつたものばかりではなく依然として重要さを失はない問題をも含めてあるのだ。現にジイドは文体の問題を（その重要さを認めながらも）この中に数へてゐる。わたしは今ここに文体に就いて述べる余白を持たないので、性急な言葉で結論を云へば、このやうにジイドが些さか榮々と文体の問題を「後に従へてしまつた」ことに対し、わたしはすぐさま「このこと甚だよし」と同意するのを躊躇するのだ。わたしは投影を伴はない切斷を認めたくないし、従つて、切斷に依り新しい生の相貌を示す諸問題をその投影をも含めて取り扱ふことを欲する。

「日記」の中でジイドは個性の問題を取り上げ、示唆の多い言葉を誌してゐる。「コンミュニズムの社会に於てさへ個人を考慮に入れないことの危険」とそこに書かれてゐる。もちろん作家アンドレ・ジイドはコンミュニズムの思想の中にあつても文体の問題を考慮に入れないのではなく、その重要さを認めつづけてゐるのではあるが、およそかかる問題の重要さが認められた以上、それはかの「十分成熟の時期に達した他の問題」と共に、緊密な關係に於て語らるべきではなかつたか。ジイドの「日記」に対し、わたしはさし当りこの素朴なる質疑を自ら提出するに止めて

おく。

「十分成熟の時期に達した他の問題」と表現する社会的関心をジイドが強調し、文学など「ほかのことはすべてその後に従へてしまつた」ことについて、石川淳は「甚だよし」とはせず、社会と文学の問題が「緊密な関係に於て語らるべきではなかつたか」と疑問を差し挟んでいる。

小松清がジイドの社会的関心を積極的に紹介していく昭和一〇年前後において、石川淳はジイドの文学的関心のあり方についてこのような要望を出しているのである。同世代で社会思想にも親しんだ履歴を持つ小松清と石川淳は、ジイドの態度に関してこうした見解の相違が見られるのである。

しかし、この点をもつて石川淳が社会的関心を重視しなかつたとは言えない。石川淳が一九三六年六月一七日から一九日にかけて『中外商業新報』に発表したエッセイ「政治的無関心」を見てみよう。このエッセイは「わたし」が「先日或る山の上に立つて海を眺めた」ときに「天地山川の氣に打たれるところが少な」く、「遠くの波のしぶき、近くの木々の若葉が濛々たる俗世間の息吹に圧倒されがちであつた」と述べるところからはじまる。

自然ではなく俗世間に注意が向いてしまふ「わたし」の自覚

は、「当人は世の中と縁を切つたやうな量見であるにしても、現にこの世の中に生存してゐる限り独り独りぎめの量見など通用せず、わたしといへども暗澹たる地上の囚のどこやらに織りこまれてゐるに相違なく、不可避的に社会に結合されてゐる」という認識を明らかにしたうえで、「政治・社会現象」について「いかなる感情の表白も不自由にしか許されない不愉快なる事実」への不満を漏らす。石川淳は「政治的無関心」のなかで、文学者も社会と関わざるを得ないこと、また日本では文学者が政治・社会的な出来事に対して自由に発言できない現状をこのように述べていくわけだが、同エッセイではその後、「最近のN・R・Fでは作家がしきりに政治を論じ、先頃の総選挙に共産党が議席七十を贏ち得たと云ふ現象は既に豊饒なる仏蘭西文化の貧婪さを示すものにほかならず、榮耀の餅の皮と云ふべきであらう。しかし、未だ榮耀の域にも至らぬ土地にあつて、茫然と貧困を歎いてばかりゐるのが我々の能ではない」と、小松清も言及していたジイドが中心人物でもある文芸雑誌『N R F』およびフランスの動向に羨望の意を示しつつ、次のように訴える。

人あつて文学者の社会的進出を唱へる。あ、社会的進出。文学者が政治に参加することか、何等の世間的地位を

占めることが、營利事業を企てることか、或いはゆる純粹小説の売行を盛ならしめることか。文学者をして文学を見失はせるやうな結果に追ひこまない限り、いかなる行動も行動の持つ卑俗らしい顔つきの故を以て直ちに卑俗と決めつけるわけには行かぬ。反対に作家の行動とは専ら作品に精進することだといふやうな高邁らしい説も、当の作家の根性が高邁でなければ鼻持がならぬ。作家の量見さへ確

ならば誰がどんな真似をしやうと安心して見てゐられる道理で、その各々が好き勝手に振舞ふ相をこそ社会的進出とは呼ぶのであらう。およそ文学の進出とは文学を他の領域に浸潤させる計算のみではなく、文学者の清談の中に俳諧同様政治を取り入れ得るやうな状態に文化を向上させることにほかならぬ。その量見なしにはどんな文学者の文化的らしい行動も文学のための努力とはなり得ないであらう。

石川淳はこのように述べ、「現在の政治情勢の下にあつて文学者は何をなすべきであるか」との自らの問いに「各々確かな量見を以て好き勝手な真似をするほかはあるまい」と記す。そして「文学者一般の態度として目下政治的に無関心であるかの如き状を呈してゐる」点について、「そのやうな出来合の仮面〔引用者注：無関心の態度〕を一応黙々と押し附けられたま

ま、文学者自らの努力は強烈に流れつづけてゐるのだ」とも書いている。

いま石川淳「政治的無関心」の内容を摘記したが、石川も当然ながら社会的・政治的な関心を強く持つており、ほかの文学者にも政治への抵抗をさえ促している。しかし、注意したいのは引用の傍線部分で、石川は「文学者の社会進出」について、「文学者が政治に参加すること」や「純粹小説の売行を盛ならしめること」を否定的な文脈で触れている点だ。文学者の政治参加は小松清がジイドの紹介のなかで積極的に展開した論点であり、純粹小説は横光がやはりジイドの方法にヒントを得つつ主張したものであった。石川淳にとつての「文学者の社会進出」とは、「文学を他の領域に浸潤させる」のではなく、「文学者の清談の中に俳諧同様政治を取り入れ得るやうな状態に文化を向上させること」であり、政治・社会と文学という問題規制のなかで、あくまで文学を核とする石川のあり方がはっきりわかるのである。だからこそ先に触れた石川淳「ジイドの『日記』に就いて」において、政治・社会への関心が前景化し、文学の問題が後退するジイドのあり方に対し、社会と文学の問題が「緊密な関係に於て語らるべきではなかつたか」と述べているのであり、また本稿冒頭で見たように、同時期に大きく注目

されていた横光「純粹小説論」と小林「私小説論」について、「四人称」も「社会的な「私」も「文学の他の問題」であり、「本来の私小説の問題を踏み超えてしまふ」と石川淳が否定した文脈も理解できるのである。

さて、「政治的無関心」は、「実をいへば、わたしはこの文章を書く代りに、山の上に立つて海を眺めた時作った俳句の話をしたかったのだ。それがさう行かないのは単に佳句を得られなかつたせぬばかりではないらしい。わたしのやうな閑人さへ俳諧を談ずる暇がないといふことは、たしかに非常時の現象であらう」と結ばれている。途中で「最近或る下等な女の行状に関する噂話が数日に亘つて都下の全新聞の紙面を埋め」ていると、一九三六年五月に起こった阿部定事件に関する言葉もあるように、このエッセイは時事性が意識されているのだが、同年二月には二二六事件も発生しており、日本は戦争に近づいて行く政治的社会的にも不安定な時期であった。その「非常時」に石川淳は政治・社会と文学のあり方についてこのように発言していたのである。

そしてこうした石川淳のあり方とも接する作家として、戦後石川淳とともに〈新戯作派〉あるいは〈無頼派〉として併称される坂口安吾にも触れておこう。坂口安吾は『作品』一九三五

年三月号に「文芸時評」欄に発表した「悲願に就て」のなかでアンドレ・ジイドの「一つの宣言」について触れ、ソビエト連邦の成立によって「革命も文学に（人間そのものに）変革を与える」と、社会「制度」が人間そのものを変化させる考えへとジイドが転向したことを述べる。しかし、このあと坂口安吾はジイドがもともと持っていた「文学は革命の準備をする」という考えの重要性を指摘し、「文学は常に習慣と闘ふこと、人間の再発見に努めること、このことは如何なる時、如何なる場合に於ても変りはない」と、文学による人間および社会の変革をより強調する。坂口安吾もまた社会（制度）へのコミットを前面に押し出すジイドの姿勢に対する懸隔を明らかにしているのである。

昭和初期におけるアンドレ・ジイドへの注目は、社会へのコミットも含めて日本の文学界に大きく波及していくが、石川淳や坂口安吾のようにこうしたなかでジイドに触れつつも文学の自立性を再考する言説も確かに存在していたのである。

三

もう一つ触れておきたいのは石川淳が「政治的無関心」にお

いて記す同時代の「文学を他の領域に浸潤させる」あり方である。すでに述べたように一九三五年四月に横光利一が発表した「純粹小説論」は文壇で大きな反響を呼んだが、冒頭で「もし文芸復興といふべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は絶対に有り得ない」と述べており、横光の「純粹小説論」には「純文学」と「通俗小説」の

接合が企図されていたのは間違いない。そして横光「純粹小説論」以後、しばらく純文学における通俗性が日本の文壇では取り沙汰されていく。たとえば「純粹小説論」発表二ヶ月後となる『文芸春秋』一九三五年六月号では川端康成「文芸時評」が、横光の「純粹小説論」に対して反応した二〇近い評論を列挙しており、その反響の大きさがよくわかる。さらにその一ヶ月後の有力な文芸雑誌『新潮』一九三五年七月号では特集「通俗小説の問題に就いて」が生まれ、片岡鉄兵「通俗小説私見」、芹沢光治良「自分の問題として」、森山啓「通俗小説」について、川端康成「純粹小説」と通俗小説」、武田麟太郎「通俗小説の問題」が寄せられており、やはりその反響の大きさを示している。^{注4}

横光の「純粹小説論」に関してはこれまで多くの研究が積み重ねられているが、山本芳明は「純粹小説論」を受けた小林秀

雄の言動を特に追いながら、その「純文学」大衆化運動」としてのあり方を浮き彫りにしている。「純文学」に対して通俗性の導入を訴える「純粹小説論」が文壇にもたらした大きなものの一つは、読者獲得という具体的な目標であり、それによって「純文学」の作家たちの目の前に（大衆）の姿が改めて可視化されたのである。

そして、こうした（純文学大衆化）に反応していったのがプロレタリア文学を含めた左派系の作家たちでもあった。先ほど挙げた森山啓「通俗小説」について（『新潮』一九三五・七）において、プロレタリア文学作家でもあった森山はこの機運のなかに「プロレタリア文学の新しい大衆的な興味の世界をひらき得る」ことを期待しているし、亀井勝一郎「私小説についての感想」（『新潮』一九三五・八）は、小林秀雄「私小説論」における「社会的私」に言及しつつ、「現在のプロ文学の「私小説的傾向」に期待する唯一のものは敗れた「私」に対する復讐をとほして、再び「社会性」をわがものにする戦闘的自意識の拡大である」と記している。

一九三三年の小林多喜二の殺害や鍋山貞親・佐野学による転向声明などを経て、この時期の日本の左派運動は退潮期となっているが、そのなかでも新たなプロレタリア文学を目指し、貴

司明治が一九三五年七月に創刊した文芸雑誌『文学案内』における「創刊の挨拶」には、「働く者の立場に立つ文学」「労働大衆に愛され、親しまれ、理解され、その生活の友となり、向上発展の歯車となる文学」「大衆の要求にこたえる作品」など、「大衆」の言葉を繰り返し使用している。また行動主義の拠点ともなった文芸雑誌『行動』創刊号（一九三三・一〇）の豊田三郎による「編集後記」にも「今まで他の分野に奪ひ去られてゐた大衆をまた文学の手に取り返す意図」が抱負として記されていた。階級闘争を見据えるプロレタリア文学にとってそもそも（大衆）は重要な存在ではあるが、（純文学大衆化）が文壇のテーマとなるなかで、改めて左派文学にとっても（大衆性）は大きな課題となっていたのである。

さてこうして見てみると、改めてこの時期にアンドレ・ジイドがブームとなっていた事実興味深い。すでに述べたように、ジイドの小説における方法的意識に対する注目がジイドの流行の要点ではあったが、同時に小松清が繰り返し発信していたように、ジイドは個人の問題だけにとどまらず社会や政治に対して積極的にコミットしていく作家としても表象されていた。日本の文学者が社会や大衆へと目を向けていくなかで、こうしたジイドの姿もまた象徴的なものとなる。そしてこれも改

めて振り返っておけば、ジイド作品の翻訳を行った作家であり、文学を後景化させ社会的政治的な姿勢を前面に出すジイドに対して微妙な反応を示していたのが石川淳だった。

「純粹小説論」が発表されて二年経過した一九三七（昭和一二）年においても、日本の文学界では（大衆）に関する言説を見ることができると、たとえば横光利一の「純粹小説論」に鋭く反応した小林秀雄は『中央公論』一九三七年一月号に「菊池寛論」を発表し、「菊池氏の新聞小説には、若し通俗性といふ言葉と大衆性といふ言葉をはつきり区別するならば、通俗性はない、大衆性だけがあるのだ。作者は読者に面白く読ませようと努力してゐるが、読者を決して軽蔑はしてゐない」と、その大衆ともにあるあり方を強調し高く評価する。また、中島健蔵「現代小説読者論」（『新潮』一九三七・一二）は、「自分が読者の誰よりも民衆の自覚を持つことに努めようではないか。自分たちの外に民衆があると考へることが、文学者としての生命の末期であることに注意すべきだ。民衆は此処に居る。文学こそは民衆中の民衆である」と、文学の民衆性を訴え、中條百合子「文学の大衆化論について」（『新潮』一九三七・五）は冒頭で「昨今、作家が一般大衆の生活感情と自分たちとの繋りについて関心を示すやうになつて来ると同時に、文壇を否定する気分

がはつきり云はれはじめた」と書き記し、「自身を今日の大衆の一人として自覚することの鮮明さ。大衆といふものが自分をこめて置かれてゐる今日の在り場所についての客観的な把握。

その中からの一人の声としての文学。これが、文学に新しい社会的な命をもたらすのである」と、作家が大衆の一人として社会を描くことに新しい文学の姿を見ている。ほかに『新潮』では一九三七年七月号において座談会「文学の大衆化の問題」(広津和郎・中條百合子・窪川鶴次郎・武田麟太郎・片岡鉄兵・島木健作・阿部知二・徳永直・中村武羅夫)が開かれており、『新潮』一九三七年一二月号では高見順「跛行が顧られる」が「私はかねて作家であると共に民衆の一人であると考えることのなかに、作家として生きる生き方を見てゐた」と、作家としての自らの民衆性を強調している。一九三七年七月には日中戦争が始まり日本は戦時下となるが、国家的な出来事が進行するなかで、それにも呼応するように文壇では作家個人の内的世界ではなく(大衆)へのまなざしが加速していくのである。

石川淳は『文学界』一九三八年一月号に小説「マルスの歌」を発表する。街に響く軍歌を思わせる流行歌「マルスの歌」に対して「NO」を突きつける語り手「わたし」を描くこの小説

は反軍的・反戦的との理由で掲載誌『文学界』は発禁処分を受けるが、小説末尾は以下の文章で閉じられている。

わたしは後へもどつて、食堂にはひり、ビールをもつて来させた。そこへ、どやどやと四五人づれではひつて来たのが、向うの席を占めると、すぐ大きい声でしゃべり出した。ああ、何をしゃべるのだ。ここでもまた、あのはなしか。片隅に、喇叭の附いた古物の蓄音器が据ゑてある。番人がレコードを掛けようとしてゐる。ああ、何を掛けるのだ。ここでもまた、あのレコード……「やめろ。」思はず、わたしは声に出してゐた。声はにくにくしくひびいたやうであつた。ひとびとはげん顔でわたしのはうへふりむいた。そして、たちまち叱責の眼がわたしを突き刺した。その叱責の中に威武を恃むものの得意さがあらはれてゐて、わたしはいらいらして来た。残りのビールを飲みほして、外に出て、門のはうへ歩き出した。うしろで、ざわめきが聞えるやうに思つた。たれかがわたしの背中にむかつて何かいつたのだらう。

この最後の場面で記されるのは戦時体制のなかで「マルスの歌」のレコードを拒否した「わたし」が大衆から疎外され、また大衆への違和を表出する姿である。本稿で確認したように政

治や社会にコミットするジイドに対して、石川淳がやや留保する態度を示していたことは、この民衆への違和が描かれる「マルスの歌」を見たときに決して小さくない意味を持つだろう。石川淳のその後の言動を見る限り政治や社会についての関心は決して低くはない。しかしながら昭和一〇年前後に文壇が政治や社会へのコミットとともに〈大衆〉への関心を強くしていくなかで、石川淳が文学と社会の関係について安易に時流に乗らず、「マルスの歌」においても〈大衆〉への違和を示している点は独特のあり方となっている。

かつて拙稿で指摘したように、この時期の石川淳作品である「普賢」〔『作品』一九三六・六〇九〕や「白描」〔『長篇文庫』一九三九・三〇六、八〇九〕には芥川龍之介の自殺をイメージさせる設定が見られ、そこには〈理想か現実か（芸術か生活か）〉という問いが織り込まれていた。^{注6} この問いも本稿で論じてきた文学と社会をめぐる石川淳の問題意識に接続でき、また今回確認した文学を重視するあり方は、この後の石川淳の作家活動全般を考えるうえでも重要であろう。石川淳は生涯にわたりのいわゆる左派思想／運動には共感をもっていたと思われるが、本稿で小松清と比較するかたちで論じたジイド評価に関する差異は、あくまで一生を作家として活動していく石川淳の重

要な根幹を表現しているのかもしれない。

なおこれまで言及してきたように昭和初期の日本の文学界は、ヨーロッパの文学・社会の動向とも密接に関連しながら変化していた。すでに昭和初期においてヨーロッパ社会との関係は即時的といってもいい段階であり、ヨーロッパとの関連なくして日本の文学界全体の動向を考えることはできない。この後訪れる世界大戦下でのナシヨナルアイデンティティを訴える言説を含めた文学言説も世界的動向のなかで考える必要があると思われるが、その前段階として本稿で触れた昭和一〇年前後の日本の文学界におけるヨーロッパ社会への注視があつたこと、そしてそれが戦時下の文学界に及ぼした影響も考えなくてはならないだろう。本稿がこれらの問題に対するささやかな貢献となれば幸いである。

注

- (1) 小松清の生涯については林俊／クロード・ピシヨワ『小松清 ヒューマニストの肖像』(一九九九・八、白亜書房)を参照した。

- (2) 野口富士男「行動」解説(複製版『行動』一九七

四・九、臨川書店）一七頁。

(3) 注(2)前掲書二三頁。

(4) 横光利一の「純粹小説論」に対する文壇の反応を記した、『文芸春秋』一九三五年六月号に寄せた川端康成の

「文芸時評」と、『新潮』一九三五年七月号に寄せた川端の

「純粹小説」と通俗小説」は、後に『純粹の声』（一九三六・九、沙羅書店）において「純粹小説論の反響」と改題のうえ、その「上」「下」として合わせて収録されている。

(5) 山本芳明『カネと文学 日本近代文学の經濟史』（二〇一三・三、新潮社）第五章「文学で食うために」参照。

また、松本和也「横光利一「純粹小説論」同時代受容分析

——昭和一〇年代における社会性」（『横光利一研究』二〇一七・三）は、「純粹小説論」以後の同時代言説を調査し、純文学のなかに「社会性」を志向していく文壇の帰趨を論じている。

(6) 拙著『わたしと世界を象ることば——昭和一〇年代の

石川淳作品とその周辺』（二〇一九・一〇、翰林書房）第

四章「芥川龍之介の影を追う——石川淳「普賢」と安吾・

太宰」参照。

* 石川淳の引用文は筑摩書房版『石川淳全集』（一九八九～九二）に拠った。引用箇所すべての旧漢字は新漢字に改め、ルビは省略した。また引用文中の傍線は引用者自身による。

付記 本稿は日本比較文学会第51回中部大会シンポジウム「近代作家のヨーロッパへのまなざし」（二〇二一・一二・四、オンライン開催）での口頭発表の一部に基づくものである。その際、ご教示・ご質問くださった方々にお礼申し上げます。また、本稿は科学研究費基盤研究（C）「世界戦争とナショナル・アイデンティティ——アジア太平洋戦争期の他者体験と文学言説」（研究課題番号20K00323）の成果の一部である。